

〔実践報告〕

アジア3か国における看護大学および関連施設の訪問から
－部局間協定および学術・学生交流の実施にむけて－

野地 有子¹⁾ 野崎 章子¹⁾ 飯田貴映子¹⁾ 辻村真由子¹⁾ 小川 俊子¹⁾
岩崎 弥生¹⁾ 館 祥平²⁾

The Report on Group Visitations to Three Nursing Universities and Related Facilities in the Asian
Countries

－ To Promote Agreement for Students and Academic Exchange, and Cooperation －

Ariko Noji¹⁾, Akiko Nosaki¹⁾, Kieko Iida¹⁾, Mayuko Tsujimura¹⁾, Toshiko Ogawa¹⁾,
Yayoi Iwasaki¹⁾, Syohei Tachi²⁾

要 旨

平成26年度国立大学改革強化推進補助金（亥鼻キャンパス高機能化構想）により平成27年3月に、国際交流実績のあるネパール連邦民主共和国、タイ王国、大韓民国の3か国の看護大学および関連施設を訪問し、部局間協定および学術・学生交流の推進について具体的に相互に検討し、アクションプランを作成した。訪問した大学は、HOPE International College（ネパール）、Khon Kaen University（タイ）、Seoul National University（韓国）であった。HOPE International Collegeでは、本研究科の国際プログラムへの大学院生の受験促進および学部で実施している「異文化看護演習」のアジアでの共同教育について検討された。また、ネパール大震災後の課題に取り組むための災害看護学における協働について話し合われた。Khon Kaen Universityにおいては、「異文化看護演習アジア」として学生の相互交換プログラムの実施および、教員と大学院生の参加する共同ワークショップの開催が検討された。Seoul National Universityにおいては、共同研究の推進など、大学院生と教員による学術交流を推進することとなった。2016年3月開催予定（千葉）の19th EAFONS（East Asian Forum of Nursing Scholars）の機会を活用した相互交流の準備が開始された。本実践報告では、グローバルに発展する看護学における学部と大学院教育に資する訪問活動の概要と結果について報告する。

Key Words：国際交流，アジア圏，異文化看護演習アジア（TCNアジア），学生・学術交流，部局間協定（MOU）

I. はじめに

看護とは人間を対象とした実践であるため、看護技術とともに対象理解が重要となるが、そのど

ちらもが社会文化的影響を大きく受けている。また、他文化圏の看護を理解することで、自国の看護を相対化して客観的に把握・理解することが可能となる。

そこで、千葉大学大学院看護学研究科は、平成21年度に文化看護国際共同研究センター（ARCセンター）を開設するなど¹⁾、アジア圏における学術・国際活動の推進に取り組んでいる^{2), 3)}。その一環として、平成26年度国立大学改革強化推進補助金（亥鼻キャンパス高機能化構想）により平成27年3月に、ネパール連邦民主共和国HOPE International College、タイ王国Khon Kaen University、大韓民国Seoul National University

1) 千葉大学大学院看護学研究科学術・国際活動委員会

2) 千葉大学大学院看護学研究科

1) Chiba University, Graduate School of Nursing, Committee of Scientific & International Affairs

2) Chiba University, Graduate School of Nursing

の3か国の看護大学および関連施設を訪問した。その目的は、1. アジア圏における異文化看護演習(TCNアジア)の開発と実施計画(学部生の単位互換プログラム(2単位)), 2. 大学院生の留学・研修派遣, 3. アジア圏の大学からの留学生の受け入れ(国際プログラム), 4. 教員のアジア圏における共同研究の促進があげられた。訪問大学の選定理由は、これら4つの目的に照らして、これまでの交流実績があり具体的な成果が得られることとした。また、3大学の訪問時に関連施設の視察も実施した。これは、学生の研修および見学先あるいは学術交流における看護実践現場での共同研究の可能性をあわせた交流プログラム開発のための情報収集とした。平成27年3月に実施された訪問について訪問国順に報告する。

II. 実施内容および結果

1. ネパール連邦民主共和国訪問

平成27年3月4日、5日の2日間にわたり、ネパール国カトマンズ市にあるHOPE International College(以下HIC)を訪問した(表1)。HICからは、大学院国際プログラムに留学生を受け入れており、今後の交流推進が期待されている。HICは、カトマンズ市内のSatdobato地域に位置し、2003年に民間企業により創設された医療系大学であり、同国国立大学であるPurbanchal大学の提携校である。提供しているコースは、薬学士(4年制)、公衆衛生学士(4年制)、看護学士(BSN; 4年制)、Post Basic Bachelor of Nursing(PBBN; 3年制)、Proficiency Certificate Level Nursing(PCL; 3年制)の5つである。BSNならびにPCLコースの卒業生はいずれも看護師国家試験を受験することができる。PBBNプログラムは、助産、地域看護、病院看護の3つの領域に特化したそれぞれのスペシャリストを養成している。同学では、グローバル人材育成を目指し全授業科目を英語で提供しているほか、3学科の教員が協働で授業運営ならびに研究プロジェクトを立ち上

げて実施している。さらに、学長は同市内のPhDコースを擁するビジネス系大学の責任者を兼任しており、PhD取得者の交流拠点となるPhDセンターを開設し、教育・研究レベルの底上げに尽力している。同学において、各コースの授業風景やICTの設備について見学した。本学教員より、本学の概要、IPEや米国アラバマ大学と実施している学生交換プログラム「異文化看護演習: Transcultural Nursing(以下TCNと記す)」について紹介した上で、相互交流について検討を行った。HIC参加者からも双方の交流・協定について積極的かつ前向きな意見が得られた。まずは、本研究科国際プログラムへの大学院生の受験促進および、TCNを「TCNアジア」として実施する可能性があることと合意し、実現に向けた検討を行うこととなった。

同大学への訪問に加え、4つの関連医療機関の視察を行った。まず、民間のTranquility Hospital and Research Centerを視察した。同病院は50床であり、治療法は電気けいれん療法およびWHOのessential drugでの薬物療法が主であり、日本や西欧で主流となっている新薬の抗精神病薬は高価であるため使用していないとのことであった。ケアのプログラムとしてヨガ等も提供されていた。ネパールでは多くの精神疾患患者が自宅にて家族のケアのもと生活しており、同院では訪問サービスも提供していた。次に、コミュニティセンターにて、HICの看護学科学学生が地域住民向けに保健講座を実施している様子を見学した。テーマは家族計画であり、同国ではその高い出生率に示されるように、現在も家族計画が主要な保健政策の一つであり、看護・保健上でも重要課題である。次に、同市内にあるネパール警察病院を見学した。同院は数百床を有する総合病院であり、手術室や透析室の設備は比較的新しいようであった。看護師も警察官であり社会的地位も高く、看護師の応募倍率も高いとのことである。病室内や中庭に多くの家族が見られ、入院中の患者の身の回りのこ

表1 HICおよび関連施設訪問・視察概要

日付(2015年)	視察・打ち合わせ等概要
3月4日(水) 午前	HOPE International College 訪問・授業見学
	Tranquility Hospital and Research Center視察
午後	Community Center 視察
	Nepal Police Hospital 視察
	Mental Disease Treatment and Rehabilitation Center視察
3月5日(木) 終日	HOPE International College 訪問・打ち合わせ

とは家族が行うのが通常ということだった。最後に、カトマンズ市郊外の民間のMental Disease Treatment and Rehabilitation Centerを見学した。居住サービス、デイサービスおよびアウトリーチサービスを提供していた。同センターのスタッフによると、同種の施設設立・運営については規定が緩く、多くの施設が設けられており、質の担保が課題であるということだった。

2. タイ王国訪問

平成27年3月18日～20日の3日間にわたり、タイ王国東北部のコンケン県にあるコンケン大学看護学部を訪問した（表2）。コンケン大学看護学部と千葉大学大学院看護学研究科は部局間協定を締結しており、部局間での相互交流プログラムの実現に向けた具体的内容を検討するために訪問となった。コンケン大学は、1964年に設立されたタイ東北部最大規模の総合大学である。17学部、1スクール、3カレッジ、1サテライトキャンパスを有し、教育・研究スタッフ約2,200人、事務職を含む支援スタッフ約8,500人を擁する。学生数は合計約4万人で、うち大学院生約1万人、留学生は約500人であり、43種類の国際プログラムを提供している。看護学部は、1971年に創設されたタイ王国最初の看護学部である。現在、看護学学士（BNS）、看護学修士（MNS）、看護学博士（PhD）の3種類の学位プログラムを提供しており、修士・博士課程では英語で授業等を展開する国際プログラムも提供している。また、3つの研究センターを併設している。コンケン大学看護学部にて学部長、副学部長（国際交流担当、研究・学術担当、学術推進担当）ら4名との打ち合わせを行った。看護学部の講義・演習室設備、外国人学生が入寮することのできる学生寮の視察の後、検討会議では、本学のTCNを紹介した後、TCNアジアとして学生の相互交換プログラムを実施する方向にて合意を得た。アクションプランとしては、平成27年度中に教員による共同研究の開始、平成28年度には、教員および院生の参加

する共同ワークショップの開催等について検討を行った。

現地医療施設の視察では、今後の学生交流や学術交流に向け、コンケン大学看護学部の実習施設や研究協力施設の3施設を訪問した。コンケン地域病院（Khon Kaen Regional Hospital）は、1951年に設立された867床の三次医療を担う公立病院で、救急・外傷ユニットは、1989年からWHO、2000年よりJICAとタイ保健省の協力を得て設立された。患者は交通外傷、転倒、溺水などによる救急搬送が多かった。患者の平均在院日数は、6～7日とのことであった。救急外来では、円滑な多職種連携がみられた。ナンボン病院（Nampong Hospital）は、コンケン県の北西部に位置する一次・二次医療を担う地域病院である。病床数は60床だが、実質的には90～120床が常に稼働しているとのことであった。内科、外科、整形外科、産婦人科、緩和ケア、タイ伝統療法の診療科を擁し、その他にクリニック（産後ケア、避妊、ウェルベビー）、訪問診察・看護も行っていった。年代別のヘルスプロモーション活動、ボランティア育成などの能力開発、疾病予防・管理活動、様々な年代や職業グループ、仏教僧との協働やネットワークづくりなど、地域性や地域の資源を最大限に活用した住民への健康支援体制づくりを行っていた。地域を支援する病院のモデルとして参考となった。二日目の午後は二手に分かれ、スリナガリンド病院（Srinagarind Hospital）とコンケン・ラジャナガリンドラ精神病院（Khon Kaen Rajanagarindra Psychiatric Hospital）を視察した。ここでは、スリナガリンド病院について報告する。当病院は、1975年に設立された約1,400床の三次医療を担う急性期病院であり、コンケン大学医学部の教育病院である。緩和ケアセンターは、2010年に開設され、地域を基盤とした緩和ケアモデルの推進を目指し、地域の医療機関や緩和ケアチームとの連携推進や、医療専門職向けの緩和ケア教育プログラム提供の役割も担ってい

表2 コンケン大学および関連施設訪問・視察概要

日付（2015年）	視察・打ち合わせ等概要
3月18日（水） 午後	Khon Kaen Regional Hospital（三次医療病院）視察
3月19日（木） 午前 午後	Nampong Hospital（一次・二次医療病院）視察
	Srinagarind Hospital（三次医療/医学部教育病院）視察
	Khon Kaen Rajanagarindra Psychiatric Hospital（精神科病院）視察
3月20日（金） 午前	Khon Kaen大学看護学部訪問 学部長・副学部長との検討会議

た。

3. 大韓民国訪問

平成27年3月26日～28日の3日間にわたり、大学間協定校である大韓民国ソウル国立大学看護学部を訪問した(表3)。ソウル国立大学看護学部とは、平成24年度に留学生交流支援事業プログラムで学部生の受け入れと派遣を行っており、さらなる交流の促進が期待されている。ソウル国立大学は、1946年アメリカ軍の指導の下、9学部からなる韓国初めての国立大学として設立され、現在16学部となっている。本部のあるメインキャンパスと、医学部、歯学部、看護学部、大学病院のあるYeongeonメディカルキャンパスの2つがある。看護学部の沿革は、1907年Daehan病院に2年間の助産師看護師プログラムの開設に始まる。1959年にソウル国立大学医学部の中の学士課程となった。1964年に修士課程、1984年に博士課程が開設された。学部は1学年約80名、2015年の大学院入学者数は、修士課程29名、修士・博士課程17名、博士課程21名であり、大学院在籍者は合計131名である。2015年のフルタイム教育研究者は21名、非常勤講師が62名、補助教員が110名、ティーチングアシスタントが5名、その他管理部門が8名である。

同校では、学部長、副学部長、国際交流委員長、学生担当委員長と今後の相互交流プログラムの検討を行った。共同研究の推進など、教員および大学院生の相互交流を図ることとなった。また、キム学部長の提案により部局間協定調印の準備を進めることとなった。

打ち合わせ後、講義室、実習室、シミュレーションセンター、スキルズラボ、看護学博物館を見学した。シミュレーションセンターは、2012年にオープンし、一般病室、小児病室、分娩室、準備室、手術室、ICUの6室から成り立っていた。小児、妊婦、成人のシミュレーターや手術台、病室の環境が整備されていた。スキルズラボには、

静脈注射、筋肉注射、胃チューブ、膀胱留置カテーテル、浣腸、気管切開などの基本的看護技術のためのシミュレーターが設置されていた。看護学博物館は、ソウル国立大学看護学部の100周年を記念して看護学部内に設立され、100年間の看護学教育の歴史、看護師のユニフォーム、看護師免許証、医療器具などが展示されていた。

現地医療施設の視察では、ソウル国立大学病院、中央大学病院、慶熙大学メディカルセンターの視察を行った。ソウル国立大学病院は、1885年に韓国で最初の国立病院として設立されたGwanghyewon病院を前身としている。1,385床(2014年12月)を有するメインホスピタルでは、はじめにDVDを用いた病院の概要の説明を受けた後、家庭看護部門の部門長から、在宅看護の4分類、すなわち、保健所による個別訪問保健事業、医療機関による家庭看護、老人長期療養保険(介護保険)による訪問看護、障害者に対する活動支援・看護について説明があった。医療機関による家庭看護は入院の代替サービスの位置づけであり、専門性の高い看護師の配置が義務づけられていた。中央大学病院と慶熙大学メディカルセンターはいずれもソウル市内の病院であり、国際診療に力を入れている病院である。両病院とも、大学院生や教員が留学した際に研修施設の候補として挙げられる。中央大学病院は、1968年に開院した病院で、870床を有する。韓国で患者満足度がトップクラスであり、甲状腺センターが有名である。慶熙大学メディカルセンターは1971年に開院した病院で1,110床を有し、ロシアや中央アジア(カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン等)からの外国人患者が多く、国際診療部門から中央アジア地域にボランティア活動として集団検診に出向き、検査・診断を行うアウトリーチ活動を行っている。

Ⅲ. 考 察

アジア3か国を訪問し、訪問大学とのこれまで

表3 ソウル国立大学および関連施設訪問・視察概要

日付(2015年)	視察・打ち合わせ等概要
3月26日(木) 午後	ソウル国立大学看護学部訪問 交際交流委員長と打ち合わせ 中央大学病院視察(院長および看護部長表敬訪問・院内視察)
3月27日(金) 午前 午後	ソウル国立大学看護学部訪問 学部長らと検討会議と学内視察 ソウル国立大学病院視察(家庭看護部門、国際診療センター、 患者照会部門、緩和ケア部門) 慶熙大学メディカルセンター視察
3月28日(土) 午前	ソウル国立大学メインキャンパス見学

の交流を基盤に、さらなる学術・学生交流について、現地において具体的な情報をもとに検討する機会を得た。ネパールでは、母子保健やメンタルヘルスなど取り組むべき課題は山積しており、経済・社会資源が乏しく限られた環境下にて、人材育成やシステム整備等により問題解決を図る必要がある、一方でグローバル人材の育成にも重点を置いていた。2015年のネパール大震災後の現在ではさらに問題が複雑化しており、災害看護学を有する本研究科においては、こうした課題にもHICとともに改善を目指した協働の可能性があげられる。タイ国コンケン大学は、インドネシア等アセアン諸国からの大学院生を多数受け入れており、国際共同開催ワークショップを実施していることから、本研究科における共同ワークショップ開催の実施についても具体的に推進できると考えられる。大韓民国ソウル国立大学は、看護基礎教育の学士課程一元化への制度変革を受け⁴⁾、医療および看護におけるリーダー育成を目指して大学院教育および国際共同研究の推進に尽力しており、学術交流推進のニーズが高くみられた。そこで、教員および大学院生の相互交流に重点を置いた交流推進の方向性が示されていると考える。今回訪問した3か国の3つの看護大学においては、いずれもグローバル人材育成を推進していることが示された。

IV. 総 括

平成26年度国立大学改革強化推進補助金（亥鼻キャンパス高機能構想）により、アジア圏3か国の3つの看護大学とその関連施設に訪問し、具体的に学術・学生交流の推進についてアクションプランを作成することができた。3大学のうち、2大学で部局間交流協定の締結がなされたかあるいは1年以内に実施が予定された。また、学部生を中心とした異文化看護演習（TCNアジア）は、3大学中2大学において検討を進めることとなった。3大学とも、本研究科の国際プログラムに大学院生を留学させることに関心が高かった。教員および大学院生による学術研究活動の共同推進についても関心が高く、今回のアジア3か国における看護大学の訪問は、2016年3月に本学で開催予定の19th EAFONS（East Asian Forum of Nursing Scholars）における交流機会の活用等を通して、さらに国際交流を推進するマイルストーンとなったといえる。今後も、様々な交流の機会を活用し、本研究科のグローバル化に視点をおいた活動を推進してゆきたい。

利益相反関係 申告すべきCOI状態はない。

謝 辞

このたびの本研究科からの訪問を快く受けいただきました。ネパール連邦民主共和国HOPE International College、タイ王国Khon Kaen University、大韓民国Seoul National Universityの看護学部長、国際交流委員会の委員長、教員の皆様、視察で訪問させていただきました関連施設の皆様、本研究科博士前期課程のShreejana Maharjanさんに感謝申し上げます。平成26年度国立大学改革強化推進補助金（亥鼻キャンパス高機能化構想）によるアジア3か国の訪問の実施に尽力くださいました。宮崎美砂子研究科長ならびに学術・国際活動委員会委員、担当事務職員の皆様方に御礼申し上げます。

文 献

- 1) Y. Mochizuki, Y. Iwasaki, H. Masaki: The Asia Research & Collaboration Center for Nursing & Cultural Studies in Japan, International Journal of Nursing Practice, 18 S2 "Nursing and Human Sciences". 4-7, 2012.
- 2) 野地有子, 小林美亜, 辻村真由子ほか: 平成24年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット（SSSV））による異文化看護（Transcultural Nursing）プログラムの取り組み－ショートステイ（SS）におけるアジア3か国の学生の受入れ－. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 36, 33-37, 2014.
- 3) 辻村真由子, 野地有子: 平成24年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット（SSSV））による異文化看護（Transcultural Nursing）プログラムの取り組み－ソウル国立大学看護学部へのショートビジット（SV）－. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 36, 39-45, 2014.
- 4) 韓水正, 金英順, 野村志保子: 順天堂大学保健看護学部第1回国際交流講演会講演 韓国における看護教育制度, 順天堂保健看護研究, 2 (1), 52-60, 2013.

